留学を終えて

益田清風高等学校　桂川　摘希（オーストラリア）

私は１年間ロータリー青少年交換プログラムに参加させていただき、オーストラリアへ留学をしました。留学期間中、私は５つのホストファミリーにお世話になり、それぞれの家庭で様々なことを学びました。しかし、どの家庭においても私が最も苦労したのは言葉の壁の問題でした。留学が始まったばかりの頃は、一生懸命何かを伝えようとしても伝わらない。何とか相手の話を理解しようとしても、何を伝えようとしているのかが分からない。そんなやりとりを続けているうちに、最後には自分の思いを伝えることを諦めてしまうということが起こっていました。そのため、最初の数週間は英語を話すことが怖くなり、返事のみを適当にするだけの日々を送っていました。しかし、このままではいけないと思い、恥ずかしがらず自分からどんどん勇気を振り絞って積極的に英語を話そうと心に決めました。カタコト英語であっても何とか話そうとすることで、周りの人たちは私の言っていることを理解しようとしてくれました。わかりやすい単語に置き換えてゆっくり話をしてくれました。そんな毎日を送っているうちに、英語を聞き取れるようになり、留学生活をより積極的に楽しめるようになりました。このような状態になるまで４ヶ月ほどかかりましたが、私は何とか言葉の壁を乗り越え、自分に自信を持つことができました。

生活にも慣れ、会話が聞き取れるようになってもオーストラリアでの生活は日本では考えられないことだらけで、驚きの連続でした。私が留学していたのは、オーストラリア３番目の都市ブリズベンから車で３時間程かかるテンターフィールドという人口３，０００人の町でした。信号を見かけることはほとんどなく、電車も通っていません。バスは１日に一本しかないという田舎の町でした。オーストラリアは、内陸部に行けば行くほど水不足が深刻で、お世話になったホストファミリーの中には、たまに降る雨水をためて生活をしているお家もありました。そのため、そういった地域では家のすぐ横に貯水槽がありました。雨が降る日がほとんどないため、水の使用量に制限があり、毎日洗濯をすることはできませんでした。１番辛かったことは、シャワーの時間が決まっていたことです。１０分使えればいい方で、ひどい時は３分しかシャワーを使えないこともありました。

水不足が深刻な影響をもたらすのは、人々の生活に対してだけではなく、周りの環境に対しての影響も目のあたりにすることができました。テンターフィールドでは、木々は枯れていて、茶色の大地が広がっていました。気温上昇と水不足により鎮火するのに２週間もかかる大きな山火事が起きたことがありました。幸いホストファミリーのお宅は避難地区にはなりませんでしたが、煙で視界が悪くなったり遠くに赤く燃える炎が見えたりすることもありました。火事は町の外で起こりましたが、風向きによって煙が町に流れ込み、ひどい時は学校の中にも煙が入りこむこともありました。不便に感じたり危険な思いをしたりすることもありましたが、日本ではありえない経験をすることができたし、いかに日本の生活が便利で安全なのかを改めて実感することができました。

私が通った高校は、農業高校でした。おもしろかったのは数人に一頭ずつ牛が与えられて、毎日餌をあげたり、洗ってあげたりするのが日課だったことです。毎日世話をするうちにその牛がどんどん可愛く思えるようになっていきました。愛情を注いで世話をした甲斐もあり、私がお世話をした牛は、南北から集まった高校の中で行われるコンクールに出品され、賞をもらうことができました。牛と一緒に歩いてみんなに見てもらえるという貴重な経験ができました。しかし、そのコンクールに出品された牛は最後には売られる運命にあります。オージービーフとして加工されてしまうのです。可愛がった牛が売られていくのを見るのは悲しかったですが、改めて命の大切さと食べ物のありがたさに気づくことができました。

留学生活も８ヶ月が経つともっとオーストラリアを楽しみたい、自分の学年や学校以外の友達をもっと増やしたいと思うようになりました。そこでダンススクールに加入し、フィジカルカルチャーというヒップホップと新体操を組み合わせたようなダンスに取り組みました。ダンス自体も楽しかったし、様々な年代の人と友達になることができました。

私はオーストラリアで１８回目の誕生日を迎えましたが、この誕生日は私にとっては生涯忘れられない誕生日になりました。オーストラリアでは誕生日を大切にしているそうですが、その中でも１８歳の誕生日は成人になる年ということで、盛大にお祝いします。私の誕生日会に、お世話になった全てのホストファミリーとロータリークラブの方々、学校の友達が集まり、総勢４０人のパーティーを開いてくれました。たくさんのプレゼントやお祝いのメッセージをいただき、一生の思い出になりました。オーストラリアで１８歳を迎えることができて最高でした。

留学中の思い出の中で一番印象的なのは、３週間かけてオーストラリア大陸の東半分をバスで旅行したサファリと呼ばれるキャンプです。総勢１６か国２７人の留学生が参加し、日本人は私だけでした。３回施設に宿泊することもありましたが、テントを張って野営することがほとんどでした。冬だったので寒くて眠れない日もありました。毎晩泊まる場所が変わるたびにテントで寝るペアが決められ、そのペアの子と２人でテントを張るのです。食事はキャンプに同行しているコックさんのお手伝いをしてごはんの準備をしていました。キャンプ中は留学生同士で助け合い、過酷で楽しい３週間を過ごしました。３週間私たちが移動した距離は、約１１，０００ｋｍでした。日本一周が約１２，０００ｋｍほどなので、それに近い距離をバスだけで移動したことになります。それでもオーストラリア大陸の半分弱なので、オーストラリアがどれだけ大きな国なのかを実感しました。シドニー、メルボルン、アデレード、ウルル、アリススプリングス、ケアンズ、アーリービーチなどの有名な観光地を回り、様々な経験をすることができました。その中でもウルルが最も心に残っています。ウルルとはエアーズロックとも呼ばれる、高さ３５０ｍ、全長３４００ｍの大きな１枚岩です。ウルルは有名な観光スポットですが、今年の１０月２６日をもって登れなくなってしまいます。その理由は先住民にとっての聖地であり汚されたくないからだそうです。また、ウルルを登る観光客の怪我や事故も問題になっているそうです。アボリジニの先住民にとって聖地に入られたくないということ、不幸な事故がこれ以上起きてほしくないということで決められたことなのでし

ょう。私たちは、ウルルには登りませんでしたが、十分ウルルを楽しむことができました。岩には過去から現在までのアボリジニの子供たちが描いた絵が描かれていて、たくさんの歴史を感じ、アボリジニの生活の背景を目にすることができました。ヘリコプターに乗ってウルルを上空から見ましたが、圧巻の景色を目の当たりにし、ウルルがなぜアボリジニの聖地であるかが分かった気がしました。サファリを通して私が得たものは、貴重な経験だけではありません。忘れられない思い出を得るのと同時に私は英語力も向上させることができたのです。サファリから帰るとホストファミリーにも、学校の友達にもすごく英語が上達していることに驚かれました。旅をしている間に留学生どうしで、お互い分かりやすい単語や表現で話を続けたことが英語力向上のきっかけになったのだと思います。

この一年を通して、私はたくさんの友達と出会い、日本では味わえない貴重な経験をすることができました。私はこの留学体験を今後も大切にして、将来は海外で活躍できる人になりたいです。そして、素敵な経験を与えてくれた皆さん全てに感謝をし、今後も自分の目標に向かって努力していきたいと思っています。